

学苑 第八七六号 八四〇八九（二〇一三・一〇）

新刊紹介

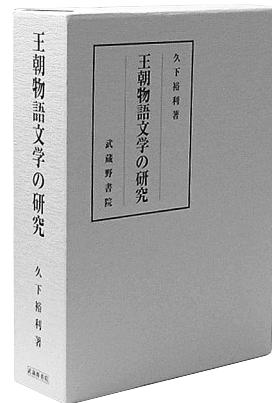
久下裕利著

『王朝物語文学の研究』

横井 孝

久下裕利氏（以下、敬称を略す）の新著、題して『王朝物語文学の研究』（以下、本書という）。武蔵野書院刊、A5判、六六〇頁の大著である。二〇一二年五月付の刊行であるのでやや時期を遅うはしたが、あらためてその上梓を嘉したい。

久下の著書はいつも一書としての主題が鮮明であることを特徴とする。たとえば本書の直前の単著論文集『物語の廻廊―『源氏物語』からの挑発』（新典社、二〇〇〇年一〇月刊）は話型論からの物語史解析であったし、その前の『源氏物語絵巻を読む―物語絵の視界』（笠間書院、一九九六年一〇月刊）はテーマが書名に端的に表されている。世に論文集なるものはほとんどが寄せ集めで、雑然とした内容をむりやり一書にした感のあるものであ



2012年5月25日発行
武蔵野書院
A5判 660頁
定価 15000円（本体）

るけれども、久下の本づくりの姿勢は、まことに見習うべきであろう。

ただし、本書は第Ⅰ部「王朝物語官名形象論―物語と史実と」（全八章）とそれ以降、第Ⅱ部「『源氏物語』論」五章、第Ⅲ部「『狭衣物語』論」八章、第Ⅳ部「孝標女の物語」五章とは性格を異にするかに見える。第Ⅱ部と第Ⅳ部にはそれぞれ「本文表現史の視界」という副題が付せられているからである。右に著者の本は「一書としての主題が鮮明」といったばかりなのに矛盾するようではあるが、かならずしもそうではない。

まず「王朝物語官名形象論」を読んでみよう。物語に登場する主要人物は官職名をもって人物の表象とされている。たとえば『源氏物語』初期

の光源氏は「中将の君」と称するが、前途洋々の若者が近衛中将という枢要の地位にあることで、当時の読者たちはその風貌を実感をもって思い描くことができたはずなのだ。しかし本書の著者は、物語研究者のほとんどが『源氏』だけに視野を限定させている現状に甘んぜず、平安後期物語の『袖ぬらす』『狭衣物語』『とりかへばや』『寝覚（夜の寝覚）』の「宰相中将」が、源頼定・源俊房・藤原師実らの人物像を明滅させているように、頼通の周辺の人物たちの動向を忠実に掬い上げていて、平安後期の時代相と密接な関係のあることを指摘する。

また、「尚侍」といえば村上天皇の登子や『源氏』の朧月夜のような、貴顕子女の皇妃のイメージが鮮烈だが、『玉藻に遊ぶ』や『みづからくゆる』のような卑小の身分の尚侍のあること、あるいは『寝覚』のように皇妃コースとして直線に描かない物語の存在をとらえて、藤原道長の娘以降に皇妃コースの尚侍が誕生しなかった時代相と合致することを説く。

——これと同様に、久下は「民部卿」「兵部卿・

式部卿」「内大臣」「藏人少将」「一品宮」「女院」を取り上げ、それぞれの官職名によって単なる人物像を抽出するわけではないのである。『源氏物語』を視野に置きつつもそれに固執せず、物語史を見据えながら、時代の要請にうながされた物語文学成立の基盤を解き明かそうとするところに真意がある。その意味で、じつは第一部は「本文、表現史の視界」と副題された第二部以降の論とリンクするのである。久下自身が「あとがき」で断っているように、浩瀚な本書ではあるが、かならずしも「網羅的（――評者云う、世間によくある「寄せ集め」）に収載してはいない」わけなのである。

本書のうちの四〇〇頁以上を占める後半三部一八章はどうか。

私見によれば、著者の「本文表現史の視界」と題する論考は「研究の動向 本文表現史の視界――『狭衣物語』の場合」（『学苑』第六七〇号、一九九五年一月）を嚆矢とし、その後断続的に用いられるが、本書の「初出一覧」によるかぎりでは、二〇〇三年ころから、第三部・第四部のいくつかの論のごとく、集中的に発表されるようになる。

その内容は、『狭衣』の諸本・本文研究の現状から『源氏』『狭衣』『寝覚』『浜松中納言物語』

などの作品世界、物語作者としての菅原孝標女の世界など多岐にわたるが、作品理解の基盤であるところの「本文」を基底において、――ここが本書の著者の真骨頂なのであるが――『源氏物語』をもって帰結点とする王朝物語研究の通例に反して、その「表現」を、平安後期をより重視して、物語史のなかから動的にとらえなおそうとしているのである。

第三部第六・七章は『狭衣』古筆切についての論ではあっても、たとえば伝阿仏尼切の「五けむ四めんなる」という断片的語句から、平安盛時の七間四面の寝殿ではなく、頼通の時代に現れる「小寝殿」をあてて考えるなど、歴史的現実が本文研究に寄与する可能性を示唆する。

第四部第四章「雪と月と」は、王朝の和歌的表現でもあり、物語にも情景描写に用いられる取り合わせであるが、「澄みわたった月下に雪が降る」という天象が『枕草子』などにはあり得ないものが、頼通の時代その文化圏の『四条宮下野集』や孝標女の作品には賞美すべき情景の「表現」として成立しているという。

本文研究が単なる本文の検証ではなく、表現研究が単なる語彙研究ではない、ということとで本書は一貫しているのである。つねに物語をつくりあげているものの基盤、あるいは物語史そのものを

意識している。それが「本文表現史の視界」なのであると思う。やはり本書においても、著者の本づくりの思想は貫かれていたことになる。それゆえ、王朝物語文学の研究における方法の、先鋭なる意思表示がなされていると読み解くべきなのが本書の存在なのである。だからこそ、評者は冒頭に記したように、本書の上梓を嘉したい。

ただ、最後にひと言だけ注文をつけたいことがある。これだけの方法意識、重要な指摘を含んだ、質量ともに重厚な本書だが、せめて序章を付すなりして、本書全体の構想や体系、「本文表現史の視界」といった重要なタームについて、あらかじめ説明してあった方が、これから斯界の学問を究めようとする人たちにとって指針となりやすかったのではないか。いきなり各論というのは単刀直入で潔いとは思うものの、これだけ総合的な研究書である以上、「総論」的な章が冒頭に欲しかった、というのは無いものねだりではないはずだ。

最近宇治十帖をめぐる新説を展開している著者は、やがて次なる著書を手がけられるであろう。その際には是非留意してもらいたいのが右の一点である。

（よこい たかし 実践女子大学教授）